
Alteration Of World basis

奇空の朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A l t e r a t i o n O f W o r l d b a s i s

【コード】

N 9 6 8 6 K

【作者名】

奇空の朱

【あらすじ】

未来世界で生きる人々

Prologue (前書き)

あいかわなずあらすじが苦手です。

長編です。

更新は技量がなく月一ぐらいになります。

よろしくお願いします。

Prologue

西暦三千七百二十五年。

ゼラ・フォーランド博士の作り出したアンドロイド・ホープにより、地球軍は壊滅させられ、人間はホープの作り出した機械兵士により七億人まで減らされ、絶望の中にいた。

だが、速水 空と抵抗軍により人間は勝利した。

西暦三千七百四十五年

西暦二千二百年頃、月に移住した地球人セレネスはそのハイテクノロジーにて地球侵略を開始する。

新地球軍は圧倒的な戦力により敗北寸前で速水 空によりセレネスの総帥が倒され。

地球軍とセレネスの間で停戦協定が結ばれ、数十年後に友好的な関係を気付くこととなった。

西暦四千一年。

セレネスは天変地異をいち早く察知し、一部の地球人を連れ地球から撤退した。

残された地球人は何も知らされていないかった。

西暦四千七十年。

世界は数度の天変地異に襲われかつて失われた大陸が浮上し、現存の大陸は沈没していき、現在では四つの大陸が世界の全てであり、人口も三千万人程まで減ってしまった。

人々は四つの大陸に、ジライグ、パルナス、クレイド、オーガと名付け大陸の名をそのまま国名にし、四つの国の代表者で作った機関を世界運営機関ワースとし世界を収めていた。

だが、それを良しとしない者達は組織を作り頻繁にテロ活動を行な

い、ワースの軍隊は壊滅状態にまで追い詰められていた。

ワースはテロによる攻撃から国を守るため、アロスと呼ばれるテロ防衛組織を作り世界中から優秀などこにも属さないフリーの傭兵を大金をかけて集め、アロスの傭兵をアロスターと呼び対抗を始めた。

Prologue (後書き)

読み直しはしてませんが、気づかない誤字や変な文があるかもしれませんので、よかったら教えて下さい。

あらすじ、プロローグは苦手です。

a p a s t # 0 1 [e n c o u n t e r] (前 書 き)

いよいよ始まりました。

頑張るぞ！

a p a s t # 0 1 「 e n c o u n t e r 」

西暦四千七十二年 四月七日

アロスの傭兵になるのは簡単だが、アロスターとして生き残るのは難しい、これはアロスの傭兵、アロスター・トモヤの口癖だった。トモヤとは軍にいた頃から仲が良く、俺が十五歳の時に上官ともめて軍を辞めてからも友人としての関係は続いていた。

最後に会ったのは俺が十八の時だったかな。

とてもいい奴だったが先月、三月五日に起こった【アスラルトタワー爆破テロ】により死んでしまったと知ったのはついさっきの事だ。

二年振りの再開が新聞の小さな死亡者一覧記事とは、なんともいえない気持ちになる。

そしてトモヤは仕事道具のアームスーツと【アスラルトタワー爆破テロ】について書かれた新聞を、わざわざ今年十歳になる一人娘のナナちゃんとともに送りつけてきた。

外はすっかり暗くなり星がまばらに見えている。

ちなみにアームスーツとは通称ASと呼ばれる戦闘兵器の事を言う。

ASは三メートル六等身程で二足歩行し、兵はこれに乗り込み戦場に赴く、昔のアニメでいうところのロボットみたいな物だ。

腰に二つと両足の底についているバーニアで数分間のホバー、最大出力による瞬間的な高度跳躍が可能、背中にアイテムパックを装備すれば数種類の武装を持ち運びできる。

ナナちゃんはそれを、AS運用車に乗せて自動操縦でここまできたらしい。

「 シュウヤおじさん。これパパから 」

両縛りの茶髪を振りながらナナちゃんは俺の名を呼び、肩に下げている黄色いバッグからキャッシュカードとメモリプレートを取り出し俺に手渡す。

俺はそれを受け取り、四角く手の平より少し大きめのメモリプレートを持ち、スイッチを入れる。

プレートの面の上にトモヤの動画が現れ一方通行の話が始まる。

「シュウヤ。お前がこれを見ているということは、俺はもう死んでいるのだから」

ああ、その通りだ馬鹿者が。

黒い短髪をかきながら憎たらしい笑顔で映るトモヤ。

「そこでお前を親友と見込んで頼みがある」

五つも年下の俺に頼み事とかすんなよ。

「俺の愛しいナナちゃんをお前に預ける、成人するまででいいからよろしく頼むぜ、養育費としてカードに二千万ロラ入っている入りの時は自由に使ってくれ」

ナナちゃんからお前が死んだと聞かされた時、そんな気がしたよ。

正直子供なんて育てた事がないので困るが、お前の頼みだ大事に育てさせて貰うよ。

「後、アロスの方に俺が死んだら自動で紹介状が送られる事になっている。いつまでも無職じゃあれだからアロスに入れ、紹介状の期間は無期限だからいつでもいいぞ」

ナナちゃんがいたって、軍の退職金で十分暮らしていけるよ【ベルファルド会戦】の英雄をなめんなよ。

「最後に親類でもないただの友人のお前に、ナナを押し付けてしまつてすまない。先に地獄で待っている」

気にするな。

安らかに眠ってくれ親友、それと俺は天国に行くから来世でまた会おう。

「シユウヤおじさん。泣いてるの？」

ああ。

俺は涙を流していたらしい、強くナナちゃんを抱きしめる。

トモヤ、お前は俺にとって最も大切な友人だったよ。

「シユウヤおじさん。痛いよ」

「ごめんよ。ナナちゃん長旅で疲れただろ？ お兄ちゃんが何か作つてあげるよ」

「うん！」

ナナちゃんはもう泣いてきたんだろうな。

そんな事を思いながら俺とナナちゃんは家に入る。

その後、空いている部屋にナナちゃんのベッドを用意し、寝むつたのを確認してからAS運用車を車庫の中にある、俺の黒いASの横に止めトモヤの赤いASの状態をみる。

「どついう事だ？」

トモヤのASを見ていて一つだけ解らない事が出来た。

トモヤはテロに巻き込まれて死んだはずなのにどうして、このASには傷一つないのか。

俺は【アスラルトタワー爆破テロ】について詳しく知らない、ナちゃんの持ってきた新聞は死亡者一覧しかみていない。トモヤはたまたま非番の時にテロに巻き込まれたのか、それとも事件の最中ASから降りなきゃいけない事があったのか。

あるとすれば前者か、トモヤに限って戦闘中にASを降りるような事はしないはず。

納得のいく答えが見つからないまま個室のソファーに腰掛け、疲れた目を休める為にまぶたを閉じる。

「……」

何かがとてつもない早さで、音をたてながら飛び交っているような音が聞こえる。

「……」

この音を最後に聞いたのは何時だろう、この銃声の音を。

俺もまだまだガキだな、昔の事を思い出しただけで夢に見てしまつとは。

銃弾が飛び交いASの残骸が散乱する戦場、俺は今ASのコクピットの中にいる。

この場所にいるだけで夢だとわかってしまうあたり、我ながら夢がないな。

「シュウヤ！ 何ほつけてやがる！」

コクピットのスピーカーからトモヤの声が聞こえてくる。

「敵が目の前にいるんだ！ ぼーとすんな！」

「そんな事よりトモヤ。ナナちゃんの好き嫌いとか教えるよ」

「いきなりなんだよ」

「早くしろよ夢から覚めちまうじゃねーか」

「意味わかんねーよ」

「あんた達！ 私語は慎みなさい！」

俺達の会話に割って入るようにアヤの怒鳴り声がコクピットに響く。

「わーってるよ！」

トモヤがめんどくさそうに答えているなか、モニターには仲間らしきASが、砲撃により破壊されていく様子が映し出されている。

「ほら行くわよ！」

この夢はあの時のいつだろうか、それとも全く関係ないんだろうか。

夢の中なのにあいつはいない。

「結局！ ナナちゃんの好きな食べ物と嫌いな食べ物はなんなんだ！？」

「へ？ 私はハンバーグが好きで、目玉焼きが嫌いだよ」

「……」

夢の中では目を開けていたから目を開けるといふ表現に違和感があるけど、夢から覚めた俺は目を開け、横から俺の顔を覗き込むナちゃんにおはようと声をかける。

「まだ朝じゃないよ」

部屋の中は電気をつけっぱなしで寝てしまったらしく明るかったが、カーテンの無い窓からは暗い外が見え、柱時計も深夜一時を指している。

「どうかしたかい？」

「おしっこ」

そつえばトイレの場所を教えてなかったな、ソファーから起き上がりポットからコーヒーを注ぎながら、口頭でトイレの場所を説明する。

「どつした？」

ナちゃんトイレに行かずに、俺の服の端を小さい手で掴み、なぜか恥ずかしそうにしている。

「怖いから、いつ……」

ナナちゃんは何かを言いかけようとしたが、途中で言葉を止め俺の部屋を出ていこうとする。

まあ、怖いって言ってたし一緒に行ってほしいんだろうな。

俺はナナちゃんを呼び止め一緒にトイレまで行き、再び俺の部屋に戻ってくる。

「シユウヤおじさん。ありがとう」

ばつが悪そうな表情をするナナちゃんの頭を優しく撫で、俺がさつきまで寝ていたソファに座って貰い、ホットミルクをご馳走する。

「熱いから気をつけて」

「うん」

俺もナナちゃんの横に座り、ビジョンシアターをつける。

五つあるチャンネルから子供よつのチャンネル選択する。

初めてみる番組で、しかも途中からだから内容は全然わからなかった。

「これ。パパとよくみたの」

悲しそうな表情をするナナちゃんはホットミルクの入ったカップをテーブルに置き、俺の方をみる。

「おじさん。ごめんね」

「何がだい？」

「本当はね。パパが死んだら叔母さんの家に行くようにいわれたの」

本来ならそうだろうな、トモヤには両親こそはいなくとも金持ちの親戚が沢山いて、トモヤの親戚の殆どはワース軍に所属している。

「でも、パパの事を悪く言う叔母さんの所に行きたくなかったの」

それは知っていた。

俺と軍のエリート部隊にいた頃は一族の誇りとまで言われていたが、軍を辞めアロスに入ると一族の恥として家を出された。

「それで、パパにパパが死んだらシユウヤおじさんの所がいいって言ったの」

ナナちゃんの瞳から一粒の涙が頬を伝う。

「でも、パパが本当に死んじゃうなんて……私が悪いのかな？ 私がパパが死んだ時の事なんて考えたから」

一粒だった涙が、とめどなく瞳から流れる。

「パパごめんなさい。パパごめんなさい！」

泣きはじめたナナちゃんを強く抱きしめる。

「ナナちゃん泣かないで。ナナちゃんは悪くないから」

トモヤ。

お前は間違いなく地獄行きだ、こんなにいい子と俺を泣かしたん

だからな。

「ナナちゃん。俺の事は気にしないでいいから、ナナちゃんが大人になるまで面倒をみるよ」

ナナちゃんを抱き上げ、背中ごしに抱きしめる。

「おじさん……ありがとう」

その後、俺とナナちゃんはソファで眠りについた。

西暦四千七十二年 四月八日

カーテンの無い窓から差し込まれた朝陽は眩しく、眠っていた俺を叩き起こす。

俺の横にはナナちゃんが眠っており、陽光の眩しさをタオルケットで顔を隠し防いでいる。一緒にまだ寝ていたいのがやることがあるので、ナナちゃんを起こさないように部屋を出る。それから、身体を伸ばし今日の家事を始める。

掃除機をかけ、窓を拭き、洗濯機を稼働、だいたい一時間ぐらいで洗濯が終わり、今は家の前にある物干し竿に洗濯物を干している。ここに引越してくる前からしている規則正しい生活が完全に染み込んでしまったらしく、最初はサボリサボリやっていた事が日課となるまでそうかからなかったと思う。

たまに引越し等の予定外の事もあるが、殆ど同じ毎日を過ごしている。

今日は朝から太陽が眩しく、四月の始めにしてはやや暑い、外も熱いのなら長袖の服なんかきかないで半袖にしておくべきだったと、額の汗を服の袖で拭きながら思う。

三年前にワース軍を辞めてから退職金生活を送る俺は、毎日をこんな感じでのんびりと過ごしていた。

「今日は何を食べるかな？」

朝と同じように身体を伸ばしながら、空を見上げる本当にいい天気だ。

まだ誰も住んでいない土地を買い取って一人暮らし、今は二人だが、やっている事はある意味余生を静かに暮らす老人か世捨て人、

今年で二十歳になる俺の人生は余生というにはまだ早く、外界から離れる気もない。

だが、何にも縛られず何もせず生きていけるということは、今の世の中では最上級の幸福と言えるかもしれない、少なくとも俺はそうだ。

「さて。そろそろ中に入るかな」

二週間前に完成した二階建てのマイホーム、そして大きなガレージ、防音の地下室と完全防備の金庫、建築士は俺が要求した事を全てクリアしてくれた。

予算は少しオーバーしたがそれでも孫の代まで遊んで暮らせるほどの金は残った。

昼をすましたら引越しの荷物を片付けよう。五日前に引越してきたのだが、まだ片付けが終わっていない午後からは荷物整理をするようにしている。

家に入り自室に向かうと、ナナちゃんがまだソファで眠っていたので、昼の準備を後回しにして昨日から気になっていた事を調べる事にする。

ナナちゃんを起こさないように、テーブルの上にある携帯電話を静かに回収し二階のパソコンがある部屋に行く。

この家には全部で八部屋あり、一階に三部屋、二階には五部屋、一階と二階にはそれぞれ風呂とトイレが備え付けられている。

一人暮らしの予定だったのでこんなに沢山の部屋はいらなかったのだが、俺が作って欲しい形にしてしまうと無駄な空間だらけの家になると言われたので、専門知識のない俺は建築士のいうとおりにした。

現在使用している部屋は一階の部屋二つを俺とナナちゃんの部屋にし、二階も部屋二つを使用しパソコンや本や資料がある書斎と、引越しの開けてない荷物を置いておく用にしている。

書斎に入った俺は、パソコン起動させワールドネットワークシステムを起動させる。

そして、ネットでアロスの番号を調べて携帯からかける。

「アロス本部です」

女の声が聞こえてくる。

「アロスター・トモヤについて知りたいんですが」

聞き方を間違えたな、他にもトモヤって名前がいたかもしれない。

「通話されているお客様はアロスターでございますか？」

「いえ、違います」

「申し訳ございませんが、アロスに所属していない方にアロスターの情報をお伝えすることはできません」

だらうな。

「そうですか。失礼しました」

一言挨拶して電話を切る。

アロスから直接情報を仕入れる事が出来ないとすると、やはりあいつを頼るしかないか、半年近く連絡していないから電話しづらいな。

気が進まないがトモヤの話を知ったので、覚悟して性格のきつい旧友に連絡しようとしたが、覚悟がたりなかったのか何度も携帯を開いたり閉じたりする。

しばらく迷っていると携帯に表示されている時間が十二時になっていた。

まあ、いつまでも迷っていてもしょうがないので、俺は意を決してアドレス帳のA行からAヤを見付けだし発信する。

心のなかで三コールで切る、三コールで切ると唱えながら、一度目のコールはでない。

「よし」

二度目のコール音を聞き、終了ボタンに指を添える

「よし、切るぞ」

「もしもし、アヤハシラハマです、失礼ですが登録してないようなので、お名前よろしいですか？」

今まさに発信を切ろうとした瞬間に電話が繋がり、懐かしい声が聞こえてくる。

最後に聞いたこの声は、確か怒鳴り声だったっけ。

それにしてもこいつ俺の番号消しやがったな、凄い名乗りづらいんだけど。

「久しぶり。シュウヤだけど……あ」

いきなり電話を切られてしまった。

そんなに俺が嫌いですか、オメーに嫌われるようなことはしてないぞ。

「！」

と、思ってる矢先に電話がなる。
アヤがかけ直してきたのかと思っただが、知らない番号からだった。
でようとは思わなかったがしつこくコールされた為、渋々通話ボ
タンを押す。

「ちよつと！ なんですすぐに出ないのよ！」

いきなりの怒声に耳が痛くなる。

俺の耳に多大な被害をあたえた声は、先程理不尽な電話の切り方
をしたアヤの声だった。

「ちよつと！ 何かいいなさいよ！」

耳が痛くて苦しんでいる俺に対して追い撃ちをしてくるアヤ、絶
対わざとだろ。

「久しぶり」

「はあ？！ 久しぶりって、もっと気の利いた事言えないの？！」

誰かこいつの上に核弾頭を落としてくれないかな。
核なんてこの世にはもう存在しないけど。

「なんで違う電話でかけ直してきたんだ？」

とりあえずいちいちかまってられないので、今の会話とは全く関
係ない話題をふる。

「え？ ああ。盗聴されてんのよ」

「なんだって?」

今、さらりと凄いいこといったぞこいつ。

「だ! か! ら! 盗聴されてんのよ!」

なんでキレてんだよ、俺も腹がたってきたので強めの口調で言い返す。

「だから誰にだよ!」

「軍の上層部に決まってんでしょ!」

何が決まってるのか、俺にもわかるように説明しろ。

「だから、カオリちゃんに頼んで盗聴されない携帯電話を作ったの」

作って貰ったんじゃないかと、作らせたんだろ。

「カオリちゃんまだ軍にいたんだ」

「当たり前じゃない」

カオリちゃんは軍の科学技術部の一員だった。

あんまり話した事ないけど、黒髪おさげと銀縁丸眼鏡はよく覚えてる。

「ところで。姉様をふった不届き者の英雄さんが、どのつら下げてどんなご用でございますか?」

「……間違えました。ごめんなさい。ごきげんよう」

「ちょっと待ちなさいよ！」

さりげなく電話を切ろうとしたが止められる。

「ねえ？　なんで姉様の事だったの？　怒らないからちゃんとした理由を教えて」

なんでトモヤの事だけききたいのに、そこまで答えないとイケないんだ。

だが、アヤは答えないと許してくれないだろうな。

「アヤ」

「うん」

「答えるのはかまわない、だが電話で話すような事じゃない、今度飯でも食おうその時にゆっくり話すよ」

俺の提案について考えてるのか、アヤは何もいわずに重苦しい沈黙がつづく。

「……ミートスパゲティー」

「ん？」

やっと沈黙から解放されたと思った矢先、意味不明なことを言われたしまった。

「あなたのミートスパゲティが食べたい」

ああ。

そういえば昔から好きだったな、こいつ。

「わかった。今度作ってやるよ」

「約束よ！ それで何の用なの？」

やっと本題に移れるようだ。

ここまで長かったな、本当に長かった。

「トモヤの事だ」

「……トモヤってあのトモヤ？」

他にどのトモヤがいるんだよと、言いたいところだが余り毒づく
と十倍で返ってくるので。

「そうだ」

とだけ答える。

「そういえば。あんた葬式にこなかったわね」

葬式したんだ。

誰がやったんだろう、トモヤの家族ではないだろうし、アロスで
葬式をしたのだろうか。

「すまない。知らなかったんだ、知ったのもついさっきだった」

「そっか。あんた昔からニュースとか見ないもんね、それでトモヤの何がききたいの？」

「あいつがどうやって死んだのかききたいんだ」

「え？　なんで？」

そりゃいきなりこんな事きいたら、なんでってなるよな。

「ちょっと気になることがあるんだ。トモヤの死体ってどうなってる？」

「トモヤの死体はないわよ」

一瞬自分の耳を疑った。

トモヤの死体がないだと。

「は？　意味わからん」

言葉の意味はわかってても、死体がないということは意味不明だ。

「トモヤの死体は見つからなかったの」

「現場検証は？」

「検証の結果、爆心地から半径百メートル以内にいた人間は即死、爆散とでたわ」

という事は、トモヤがなんでASに乗っていなかったという事と、何故爆心地のすぐそばにいたのが、気になるところだな。あと詳しい状況もしりたい。

「そうか……検証資料とかもらえないかな？」

「流石にそれは無理かな。エリート部隊って言うてもただの中隊長だし」

「あれ？ 小隊長から中隊長になっただんだ？」

俺が軍にいた時は、パイロットの俺とトモヤとユキ、補給車運転主のコウジ、オペレーターのジヤニス、メカニック担当のカオリちゃん計六名をアヤが小隊長兼パイロットとして指揮していた。

「そうよ、出世したんだから少しは敬え！ てかいつになったら私に敬語使うようになるのよ、わたしと二つも違うんだから人生の先輩として尊敬しなさい」

「え〜」

「え〜じゃない！ とりあえず明日の夜八時に行くからミートスパゲティー作っておきなさい！」

「明日!?!」

おいおい急だな、俺の予定を聞けよ。

「そうよ。なんか文句あるの?」

「いや、その、まあ、いろいろと」

文句というか、俺にも何か予定があるかもしれないし、たぶんあ
ると思うし、ここは断ろう。

「行くから!」

「ちょ!……あ」

断ろうとした矢先電話を切りやがった。

「はあ……仕方ないな」

「何が仕方ないの?」

「うおわ!」

急に話かけてきたナナちゃんに驚き椅子から落ちそうになる。

「大丈夫? シュウヤおじさん」

「ああ……ナナちゃんおはよう」

全然気配を感じなかった。

これが、くのいちというやつか。

「おはようございます」

手を前に揃えて挨拶をするナナちゃん。

「ナナちゃん。礼儀正しいね」

「えへへ。ありがとう」

その後、ナナちゃんとお昼を済ませ明日のミートスパゲティを作る為の食材を買いに、車で三十分程のところにあるカルクラタウンに出かける。

タウンの入口にあるパーキングエリアに車を止め、商店街まで歩く、今日は平日の為かあまり人がいなく悠々と町を歩ける。

「ナナちゃん。何か欲しい物あるかな？」

「うん。ないかな」

タウンを小さい子と並んで歩く俺は周りから見れば親子、いや兄妹かな。

「遠慮しないでいいからね」

「うん」

商店街に入り人気が特に主婦らしき人とそれに連れられた子供が多くなってくる。

今まで気にもしなかったが、子供の服でもいろいろあるんだな。

そういえば、ナナちゃんあんまり服持ってなかったよな、運用車から服を運び出した時も二、三着しかなかったような。

ちよつとよく洋服店が見えてくる。

「服みていこうか」

「いいの？」

ナナちゃんはあるまい気乗りしない感じだ。
嫌そうではないが、そうだなあえて言うのなら困っているような
感じだ。

「ああ、もちろん」

気になるが、そういう事を聞くのもあれだよな。
洋服店に入り子供サイズの服を探す。

「俺センスないから、ナナちゃん好きな服選んでいいからね」

「え〜。ナナもよくわかんないよ」

「それは困った」

ナナちゃんしっかりした感じがするから、ちょちょいと選んでく
れると思ったが。

仕方ないまた今度にしよう。

「そうだ」

一瞬使える者は使ったことと言つ言葉と、アヤの事を思い出した。

「あの」

「はい。なんででしょうか？」

店員を呼びとめ何時まで店が開いているか尋ねる。

「営業時間は零時までしておりますが」

「へえ。そんなに遅くまで営業してるんだ」

「最近旅行者の方が多く、遅くに着替えを買いにくるんですよ」

「なるほど」

カルクラタウンは、大都市オーガと港町ササユとの間にあり、ササユからオーガに行くのに車で十時間ぐらいかかる事を考えれば、旅行者が頻繁にカルクラタウンを通り長旅の物資を買い揃えるのは当たり前か。

「どうも。ナナちゃんいこうか？」

「うん」

「ありがとうございました」

明日アヤを連れてこよう。

洋服店を後にした俺達は、ランドセルを背負った子供達とすれ違つ。なんとなく気になった事があったので、ナナちゃんに聞いてみる。

「ナナちゃん学校とか今までどうしてたのかな？」

「学校行ってないよ。パパと一緒にアロスのお仕事で世界中行つたから」

「そっか。ナナちゃんは学校行きたくない？」

「……行きたい」

そうだろうな、このぶんじゃ友達もいなさそうだ。

なんとかして学校に行かせてあげたいな、でもナナちゃんの年を考えると四年生ぐらいか。

そこまでの知識がなきゃ、学校に行っても大変なだけか。

「ちよつと本屋によっていいかな？」

「うん」

本屋で四年生までの教科書を買ひ揃え、ナナちゃんに漫画と絵本を買ひ本屋を出る。

つい三百年前までは本という紙媒体ではなく、デジタルブックというものがあつたが、天変地異でデジタルブックの技術が失われた為、再び本が生まれた。

今の技術力でもデジタルブックを作れると思うのだが、今の世界は軍事と生活再生の為に技術が使われている。

その後、スパゲティーとハンバーグの食材を買ひ家に帰る。

夕飯をハンバーグにしナナちゃんの喜ぶ顔を見れて満足だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9686k/>

Alteration Of World basis

2010年10月9日05時55分発行